

対談・『国境の南、太陽の西』 (V)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 英行, 高野, 圭子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007995

対談・『国境の南、太陽の西』（V）

酒井 英行
高野 圭子

V 現実での男／女の関係の不可能性

酒井 現実での男／女の関係の不可能性、ということ、話を進めたいと思います。始が三十歳のとき、五歳下の有紀子と結婚したということになっていて。作品の現在の始が、三十六歳か七歳ですから、結婚して六、七年経っているというようになります。子どもも、女の子が二人生まれています。語りでは、始が旅行先の田舎道を散歩しているとき、突然激しい雨が降ってきて、雨宿りに飛び込んだところに、有紀子がいて、そこで知り合って、結婚したことになる。偶然の出会いですが、互いに一目で惹かれあったというのですね。有紀子とこの結婚は、結婚したところから語りだすんですって？ それとも、島本さんが店に来るようになって、回想する形で有紀子との出会いを語ってんですって？

高野

はい。回想ですね。二十八歳のときに、渋谷で島本さんのような女性を見かけて、追っかけたんだけど、不思議な男から十万円が入った封筒をもらったことがあった、という記述の後の回想で、……。二十八歳、三十歳、って……

酒井

島本さんが店に來だして、その後で、有紀子との家庭、日常生活を語るということは、島本さんが来る前の有紀子との結婚生活は、語るに価しないものだったということになるのですかね？ 言い換えれば、始の幻想の中にいた島本さんが、現実の女性として、現実世界に存在し始めることによって、有紀子との結婚生活が意識され始めたということになるのですかね？ つまり、有紀子との結婚生活は、何の変哲もない日常生活、朝起きて、ご飯食べて、仕事して、夜寝ました、……。っていう、色彩に乏しい些事の連続だったのでしょうか？

高野

あの、始が、「おおむね幸せな生活を送っていたと、言っていると思う」というような、持って回った言い方をしますよね。それから、島本さんに、幸せなんですよ？ って聞かれて、「幸せなのかどうかは、自分ではよくわからないね。でも少なくとも不幸だとは思わないし、孤独でもない」、「でも僕はときどきなにかの拍子にふと思うことがあるんだ。君の家の居間でふたりで音楽を聴いているときに僕の人生でいちばん幸せな時代じゃなかったらうかってね」と答えています。島本さんとの会話なので、この少年時代の二人のエピソードを付け加えたのかもしれないですけど、……。それにしても、その前の、回想の語りの場面でも、不満と言えるほどのものは「僕」には無かった、なんて言い方をしていて、結局、始は、有紀子との生活を、島本さんの記憶と比べて、曖昧ながら、否定的な物言いをしていますし、無関心さを感じさせます。有紀子と出会った時には、久しぶりに感じた吸引力だった、とか、彼女の顔たちの中にはっきりと自分のためのものを感じることができた、とかって、有紀子を、自分にとっての、特別な存在として、語っているのに、……。それに比べると、結婚生活の中の有紀子は、ずいぶんと、影が薄いと言うか、煤けてしまっているような感じがします。

酒井 そうですね。今、高野さんが指摘した、有紀子との劇的な出会いを語る始の語りとですね、彼女との結婚生活を語

る語りとの間には溝があるように思えます。回想でしか語られない有紀子との結婚生活と、「理不尽なくらい激しく引かれた」、「久しぶりに感じた吸引力だ」という特権化された出会いとの間に整合性が無い感じがして。

高野 ええ。

酒井 変なのは、有紀子っていうのは、始が田舎を旅していて、旅先で急に雨が降ってきて、傘を持っていなかったの、雨宿りに入ったら、そこに二人の旅行中の女性がいて。もう一人のほうが、とても美しい女性であって、有紀子のほうは、……

高野 もう一人の方が、ずっと美人だった、って。これ、すごい言い様ですよ（笑）。

酒井 もう一人のほうがずっと美人だった、とわざわざ言っていますよね。相対化された、そんなに美人じゃなかった「平凡な顔たち」の有紀子に、しかし、吸引力を感じたというのですね。吸引力の原型は島本さんに感じたわけですが、実は、高校時代にイズミと交際していたとき、イズミの従姉を一目見たときにも、吸引力を感じていた、……。という意味では、イズミの従姉が、島本さんと有紀子を繋ぐ中継点のような役目を果たしていると言えるでしょう。この三人の女性に感じたものを、始は吸引力だと説明しているわけで、だとすると、有紀子はある意味では、絶対的な女性であるはずなのに、最後のところで、有紀子が、「私はあなたには十分な女ではなかったのよ」と言っていて。

高野 はい。それは、わかっていたって、……

酒井 「なんとなくわかっていた」から、有紀子だけでは足りなくなる事態、つまり、島本さんのような女性が出現することとは予感していたと。それを始のほうも否定していません。有紀子が「十分な女」ではなかったことを認めているわけです。ということは、高校のとき、イズミとつきあうんだけど、イズミは島本さんが与えてくれたようなものは、

与えてくれない、なんだか、これは違うつて思いつつ、イズミとつきあっていたような、……

高野 ええ。

酒井

イズミも、有紀子も、その点では同じで、完全じゃない、……。吸引力を感じた女性という意味では、島本さん、

イズミの従姉、有紀子は、同一円内にいる女性で、始は結局のところ、この三人の女性とは、性的関係を持ちますね。

イズミにだけは、吸引力を感じていない、だから、イズミとは性交をしていない、ということなのでしょうかね？

イズミに対して、どこか違う、島本さんが与えてくれたものを与えてくれない女の子だ、と思いつつ、でも、がさつ

な男の子の性欲から、スカートの下に手を入れることしか考えられずに、イズミに猪突猛進している。吸引力の有無

という点で、イズミと有紀子には差異があるものの、島本さんとの差異としての「十分な女」ではないという点で、

イズミと有紀子は横並びの存在ですね、始にとつて。有紀子は、もともと、相対化されちゃっているというか、始に

とつて、絶対的な女性としては、出会っていない、……

高野

私は、その、有紀子は、一応現実には生きている、生身の女性として書かれていますので、ある時は一〇〇%、ある時

は五〇%、つていうふうに感じるのは、当然だろうって、まず、思います。それこそマイナスの時だつてあるだろう

し（笑）。

酒井

うん、うん。

高野

あの、その前に、吸引力についてなんですけど。

酒井

うん。

高野

「久しぶりに感じた吸引力だった」なんて、始は、勿体ぶって、というか、いかにも特別な存在と認めたときだけ

に、この吸引力という言葉を使っているみたいなんですけど。

酒井 そうだね。

高野

でも、その吸引力を感じた女の子を、今、先生があげられたように、並べてみると、時には、それは、十七、八歳の男の子の劣情というか（笑）、むき出しの性欲を、吸引力と感じていただけだったり。ある時は、島本さんの記憶のように、自分を、無条件に受け入れてくれるような、母性的な包容力を、そのように感じたりしているだけのようで。そう考えると、実は、この「吸引力」という言葉には、特別な意味は、無いんじゃないかって、私は思うんです。身も蓋もない言い方ですが（笑）。この「吸引力」っていうのは、始が、自分が、すごく異性にひかれた時、そういう自分の思いを、吸引力と名付け、勝手にそう呼んでいるだけじゃないでしょうか。それは、言いかえれば、愛っていう言葉の用い方と、ほとんど同じだと、私には思えます。愛しているよ、って言っても、それが、ただの肉欲だったり、一人の寂しさを紛らわすためだったり、同情を勘違いしたり、……、私たちは、そういう色んな思いを、平気で愛って呼びます。それと同じように、始は、その時々、自分が欲する女に、吸引力という名目を与えて、自分を納得させているだけだと思うんです。だからこそ、有紀子のことを、結婚してからは、吸引力の欠片も感じさせない女のように（笑）平気で言えるんだと思うんです。子どももいて、財を成し功を遂げた（笑）自分の生活を、おおむね幸せだと言っていると思う、というような、まあ、傲慢な言い方をして、有紀子は、生活の一部であって、心を震わせるものは何もない、なんて、ほんとに、ひどい言い方をして、切って捨てるように、貶めている。ですから、それは、吸引力があるかないか、なんていう事ではなくて、始が、その場その場、その時々、名付けて、用いているだけなんだろうと思うんです。

酒井

それは、さつき確認したように、三十歳のとき結婚しました、幸せと言えば幸せと言えるけど、幸せだなっていうほどの充実感はない……。ま、そういう意味での、幸せな生活を六、七年過ごしてきました、子どもも二人生まれて、

家庭というものも築けました。そこに、島本さんがやって来たから、有紀子との日常生活、有紀子というものが色を失ってしまった、……

高野 そういうことではないと思います。

酒井 そういう語りじゃない、……。

高野 ええ。有紀子は一貫して有紀子であって、……。だけど、一人の人間が、変化したり、様々な面を持つのは、当たり前のことですし。ただ、始は、有紀子と結婚して、貧乏な一介のサラリーマンから、有紀子の父親の援助によって事業を起こして。

酒井 はい。

高野 それは、義父からの、金銭や情報など、大きな援助によって、うまくいったわけですね。それで、アルマーニ着て、外車に乗って、別荘もあつて。子どもを私立の幼稚園に車で送って行って、奥さんはダイエットにお金をつかって、……。まあ、絵に描いたような中流階級の、セレブな生活っていうんですか（笑）。有紀子も「ダイエットとワークアウトが重要な関心事になっている」妻、ですよ。

酒井 有紀子の買物のための車が、ジープ・チェロキーでね。私は車には詳しくないんですけど、これも外車ですか？

高野 そうですね、外車ですね。

酒井 始もBMW320で、奥さんも、買物用と言いつつ、外車、……。

高野 しかも、おしゃれな、アウトドア用の。それで、スーパージョイ屋とか、行っちゃうんでしょね。庶民の憧れの、ハイソサエティな暮らし、みたいな感じですね。

酒井 ああ。

高野

一生懸命働いて、お店がうまくいくかどうか、気を張っていたころは、始君も、そんなことは、あんまり考えなかったと思うんですけど。今、三十歳代後半に入って、成功と安定が手に入った。そこで、そういう自分や、今の生活を、確かに幸せなんだろうけど、でも、これでいいんだろうか、って振り返る時期を、迎えたっていうことじゃないでしょうか。そして、さっき、先生がおっしゃったみたいに、細胞の一つ一つが、自分自身だっと思えるような、聞いた音楽、読んだ本が、全部、自分の細胞に刻み込まれるような、かつて、そうであった完全な自分自身とは、大きく違ってしまった、って感じてしまつて、違和感とか、罪悪感、……かなあ、そういう思いに心が占められてしまっている。でも、私は、それも、あきらかに幻想だと思えますけどね。過ぎてしまったことから、そう思えるだけで、現実にはありえないでしょって（笑）。

酒井

まあ、語りとして、自分の孤独を癒してくれるという意味で、有紀子はありがたい、自分の孤独を回避させてくれる女性だけど、自分を自分でなくしてしまつて、自分を、……、特に、義父が象徴するような、……

高野

はい。

酒井

資本主義のシステムに取り込む契機として有紀子がいて。

高野

そうなんですよね。

酒井

それで、有紀子に対するアンビヴァレントな感情が生じているのかも知れませんね。資本主義システムに自分を取り込む有紀子への無意識的な否定感情と、家庭で慰安を与えてくれる有紀子に対する甘え。有紀子との結婚生活を、幸福といえは幸福だけど、っていう語りには、有紀子を妻というよりも、母親として見ている甘えが現れていると思います。日本人男性には、妻を母に見立てて、その母の胸に抱かれて甘える赤ん坊に後退してしまう幼さがあると言われていますが、始も、ときどき、有紀子の役割を、自分を現実に繋ぎとめてくれる、自分がどこかに行ってしまう

ないように繋ぎとめてくれるところに求めています。

高野 ええ。「ここにいれば僕は愛されて守られている。ここが自分の場所なんだ」って、言っていますから、……

酒井 ということは、まるで、母親の胸で安らぐ息子のような関係になっいて、……

高野 はい。

酒井 だから、妻であると同時に母として有紀子に甘えている。そういう有紀子との家庭生活の中に島本さんが出現して、決定的に亀裂が入っちゃった後の語りんだけど、結局、僕らは、割り振られた役柄を、単にこなしていただけてきちゃった、という空虚な思い。善き妻、善き母親、善き夫、善き父親っていう役柄と役柄として接していただけかも知れないという思い。結局、有紀子の内面、本当の自我に向き合っていなかった、お互いが、お互いの、本質に触れ合わないままの、「幸せな家庭」、青山の4LDKのマンションに住んでいて、箱根に別荘を持っていて、云々という、セレブな生活をしているっていうことを認めている。そのギャップが始にはあって、割り振られた役柄を演じてただけで、それは、本当の幸福じゃなかった、本当の人間関係じゃなかった、……

高野 その、自分自身が、生きていくという実感が、始にとって、今は、乏しい。それに対して、過去の記憶の中では、始君が、孤独であつたし寂しかったけれども、ほんとうにあの頃、自分は自分自身だった、っていう気がしている。自分のことばかり考えて（笑）、そこにどっぷり浸っていた頃ですから、それはそうだろうと思いますけどね、私は。それと比べて、今は、りっぱな社会人、しかも実業家で、家庭では、夫であり父である。そういう自分を「それは僕にとって、まったく新しい体験であり、自分がそういう立場にたつてやっていくことが出来るのだ、ということ」は、思いがけない発見だった。」って言う。「僕は妻と娘たちを愛し守っているのだ」とか、……。『僕』は、妻や娘から愛し守られているけれども、自分自身も、彼らを愛し守っている。自分が、そういうことができる人間で、そうい

う立場に自分がいるっていうことに、驚いています。自分が、他の人とは違っていて、欠落しているところがあった、だから孤独な、独特な存在だったはずなのに、ふと気がつけば、他の人たちよりも、上手に世渡りしているじゃないか、っていう、自身への、驚きというか、不信みたいなものがあるんじゃないでしょうか、しかも、それが、有紀子の父親からの援助があつてこそのもので、そういうお金を、現実の経済、資本主義のシステムの中でうまく回すような、そういう、自分の能力は、始の自己認識、自己像とは、ずれているわけですよ。一人っ子で、欠けている部分があつて、他の人とは違うっていう、ある意味、自分の存在意義っていうか、自意識が、ここで、大きく揺らいでしまふ。あなたは、非常に現実に上手に適応している、健康な成人男性であり、よくできた家庭人ですよって言われると、始は、そんなはずはないって、それは、本当の自分自身じゃないって、反射的に、思ってしまうんでしょうね。

酒井 島本さんが現れるまでのその六、七年間の結婚生活……。島本さんとの触れ合いは、俗にいう、七年目の浮気(笑)、っていうように、……

高野 はい(笑)。

酒井 この話は、そういう俗説を踏まえた設定になっているところが、……

高野 春樹らしいですよ(笑)。

酒井 春樹らしいんだけど、そこに、また島本さんが来たっていうのもね、その、七年目の浮気っていうのを思い出させる設定になっているんだけど。

高野 ええ。

酒井 ここで考えたいのは、有紀子と始という男／女が、現実に関わり合うことが、いかに困難か、不可能か、っていう、この章のタイトルなんだけれども、それは、結婚して、日常生活を営み、子どもができて、家庭で、役柄を役柄として

こなさざるを得ない面もありますね。父親が、父親の役割を、子どもの前でしなかったら、家庭生活は成り立たないわけですから。

高野 そうですね。

酒井 ですから、役割をこなすっていうのは、家庭というものを持った以上は、必然的なことで。本当の自分はどうか、自分の本質はどうか、ということは、括弧にくくって考えない、ということは、必ずしも、否定的に見ることもなくて。

高野 はい、その通りです。

酒井 夫婦関係とか家庭生活を営むうえで、役割を果たすっていうことは必要なことで、……

高野 必要なことですよ。

酒井 こなさなかったら大変で。現実生活を共にし、役割をこなすなかで、愛というものの、この作品のなかで吸引力って言っているものが、摩滅していく、ということ表現しているのですかね？「理不尽なくらい激しく引かれ」、「自分のためのもの」があると感じられた有紀子であっても、現実の女性として生活を共にしていくと、吸引力は磨耗していくということ……。それは、島本さんという幻想の女性が来たから、有紀子との生活に溝ができて、最後は、家庭内別居みたいな状態にまでなってしまったと考えるのではなく、島本さんが来なくても、男女が現実的に、夫婦として日常生活を共にする中で、ひとりりでそうなるものだって、仕方が無いことだって、春樹が書いているのか。ところで、有紀子が一人目の子どもを産んだあと、少し太りだして、ダイエットとワークアウトが重要な関心事になった、っていうところは、まだ、島本さんが来ない前ですよ。

高野 はい。

酒井

そういう有紀子を、始は、愛していた、美しいと思っていた、と語っています。しかし、これは、有紀子に向かつて言語化されたわけではなく、始が心の中で思っていただけです。つまり、島本さんが現れる前には、始が有紀子に愛情を言語化する場面は描かれていません。有紀子に愛情めいた言葉を発するのは、島本さんに心が奪われてしまっ

高野

ええ、言いますね。

酒井

「君の体が好きだよ」というのは、ほんとうの愛情表現の言葉とは思えませんし、島本さんへ傾斜していくことの罪滅ぼしの言語化という感じですね。リップ・サービス。島本さんが出てきた後は、愛していた、美しいと思っていた、という思いは、どこかへ行ってしまう、「君の体が好きだ」といった口先だけのお世辞を言うだけです。島本さんのイメージを持ったまま、有紀子の身体に分け入ったとか、島本さんのことを思い浮かべながら交わったとか、……

高野

もう有紀子は、完全に、島本さんの影に隠れてしまっている感じですね。

酒井

うん。

高野

先生が今おっしゃったみたいに、出逢って、お互いひかれ合って、そして結婚して。で、色んな苦労しながらも、七年間、子どももでき、家も買い、生活も安定してきて。そういうとき、何となく、お互いが、……、遠ざかったっていうか、……、最初の関係と違ってくるのは、当然だと思いませんか。役割も、やらなければならぬことも、変わってくるだろうし。

酒井

はい。

高野

あの、夫婦二人だけじゃなくて、子どもがいるっていうだけで、ずいぶん違ってくるはずですよ。だけど、そんな中

でも、「僕」は彼女と一緒にいるのが好きだったし、彼女と寝るのが好きだったとか、彼女は相変わらず美しいと思っ
ていたとかつて、……

酒井 それは、島本さんが現れる前のことですよ。

高野 はい、その前ですけど。だけど、若い頃、出逢った頃の気持ちとは変わってはいるけれど、でも、……、って思
ながら、なんか、そういう今の自分が、ほんとの自分じゃないみたいだ、て、感じている。なんだか、誤魔化してい
るような、後ろめたさというか、本当の自分を裏切っているような気持ちなのかな、……。自分らしくない、って。
酒井 そういうことを感じていて、それで、島本さんが来だして、石川県の川に行つた四日後に、有紀子の父親に呼び出
されて、トンネル会社の名義人にならされ、資本主義システムに組み込まれることに嫌悪感を抱き、それが引き金に
なつて、もう、こんなのは嫌だつて、株を全部、八〇〇万、……

高野 ええ、義父が言つてきた株を、……。

酒井 それを全部解約しろつて。今までは、父親が言う通りにやつてきていたのに、全部解約しろつて言う。それは、だ
んだん自分が、俗物化していくつていうか、資本主義社会に巻き込まれていく。妻に誘導されているように感じなが
ら、父親の側に組み込まれていく。そういう自分に違和感を持っていて、島本さんと石川県に行つて、そこで、ある
意味、決定的に今まで生きていた世界とは異なる世界に移行してしまつてゐる。

高野 はい。

酒井 それから、今までの現実、もう、居たたまれなくなつた。

高野 ずっと、島本さんのことを考えていて、で、家に帰つた時は、良い父親、良い夫でゐるのは、もう、続けられない
と思つてしまつた。まあ、始が、そう演じているつもりだった、ということですけど。有紀子には、ばれられだつた

としても、ですね。

酒井 その、有紀子にばればれだった、っていうのは、大切なところだと思うんですけど。島本さんが現れる以前も、始

のほうは、家庭生活の中で、父親・夫という役柄として存在していて、……

高野 違和感が常に付きまとって……

酒井 そのように役割としてしか生きていない夫に対して、妻・有紀子は、どのような思いを持って連れ添っていたのか、っていうのは、まったくわからなくて。そして、島本さんが現れて、島本さんのことを考えながら、でも、セックスしようとかって言って。

高野 ええ。

酒井 始のその有り様はみえみえであって、好きな人がいるんでしょう、って見破られていて。それを知っていて、その上で、有紀子が、その始の性的な求めにに応じていた、っていうところが、有紀子という専業主婦の弱さ・哀しさかなと考えさせられちゃうんですけどね。

高野 はい、そうですね。でも、有紀子の、それは、やっぱり始への愛というか、夫婦の情というか、……。それは、家族や家庭というものを、守るためのかな、やっぱり……。あの、有紀子は、家族になっちゃったら、男／女が、変わって行くなんてことは、自明の理として、受け入れているのだと思います。そういうふうに関係性が変わって、三十歳と二十五歳だった男女が、結婚して、夫婦、家族になった。七年もたって、出会った頃と、まったく同じではいられないっていうのは、当然のことです。それが嫌だとか、そんなの本当の自分じゃない、なんて言うのは、齢をとるのが嫌だ、生きていくのが嫌だ、っていうのと同じことになりますから。じゃあ、何が、この夫婦の問題だったのか、っていうと、始が、感じていた違和感を、……、たとえば、有紀子のお父さんから、お金を儲けさせてもらって

いるのが、実は、ほんとうは嫌なんだとか、しかも、妻の父親から、っていうのが、居心地が悪いつていうか、不本意な思いがあるんだとか、っていうのを、一切、有紀子には、言っていないですよ、たぶん。それで、有紀子にとつて、良い夫であつたり、……。あの、子どもたちを、車で、良い外車で幼稚園に送っていくとき、一緒に歌なんか歌っちゃつて（笑）、いかにも今風の、良い父親像を、演じていて。でも、違和感をずっと抱えている。それを、この始の、彼なりの規範とでもいうんでしょうか、自己の内側に抑えこんで、妻や子どもたちへは向けないんですよ。隠すという気持ちというより、それ見せてはいけないうて思っているみたいで。その、良い夫、良い父親でいることが、家族を愛する、守るということに、なつてしまつているんでしょうね、始にとつては。

酒井

それは一貫していて、それは始の優しさなのか、……。それとも、役割以外の自分の外には一歩も出ようとしないう閉鎖的傾向なのか……。お義父さんの言う通りに動くことだね、確かに、生活は安定したけど、実は、学生運動の精神に共振した心性の名残があるから、資本主義に巻き込まれているみたいだし、ずるしているみたいで、嫌なんだよつて、いうことを、始が有紀子に言つておけば、また、違つたでしょうね、……

高野

ええ。全然、違つたと思います。めちゃくちゃ夫婦喧嘩になつたかもしれませんけど（笑）。

酒井

そうだね（笑）。

高野

誰のおかげでこんな良い所に住めていると思つているのよ、とかつて、有紀子が爆発しているかもしれないし（笑）。

しかも、それでは、小説にもならない（笑）。

酒井

でも、現実の夫婦であれば、爆発するでしょうし、爆発するからこそ、夫婦でぶつかりあつて、……

高野

ぶつかつて、違う關係に、……

酒井

違う關係になれたでしょう。

高野 別れが来るかもしれないけど。だけれども、……

酒井 別れたかもしれないけどね。

高野 違う関係になつて、こんなふうに、幽霊のような島本さんが現れる状況には、ならなかったと思いますね。

酒井 うん。

高野 始は、それを、有紀子に伝えずに、ただただ、自分だけの問題として、自己の内側に秘めていて。たぶん、島本さんだったら、こういう「僕」を、言わなくてもわかつてくれたはず、……、とかつて、思っていたんじゃないでしょうかね。島本さんだったら、きつと、つて。始と有紀子が、いかにすれ違っているか、そのずれが、すごくよく書かれていると思います、この場面は。ですから、男性ジェンダーにとつて、……、ここで一般化していいのかわからないですけど、妻は、語り合うべき相手ではない、つていうことになるんだらうなつて、改めて、私は感じました。妻という位置に置かれた女性ジェンダーは、……

酒井 それは日本の多くの夫の妻への関わり方である、一人の女性として見ない関係性、妻とか母としてしか、有紀子を見ないせいなのか、それとも、十二歳のときの島本さんのイメージが、あまりにも強烈だから、常に始はそれしか頭がないから、目の前にいる結婚した妻、二人の娘の母である有紀子つていう存在に、ほんとうには向かい合おうとしなかった、つていうところに、この夫婦の、幸せとしか言いようがないんだけど、本当は幸せじゃない、関係性があるのかな、……

高野 それは、言わば、逃げつていうか。現実を壊したくないつていう。

酒井 ああ。

高野 今の平和、幸せを壊したくないつていう、始のずるさみたいなものがあつて。よくある話ですけど、本当の気持ち

は飲み屋の女の人には言えるけど、妻には言えない、とか（笑）。目の前の人には言えないことが、まったくの赤の他人とか、お金を払って遊ぶ相手には、言えるとか。いわゆる、ヘテロセクシャルの関係性においては、こういうことが、ありがちなのではないだろうか。始と有紀子との、一見幸せな夫婦にあった、すれ違い方の、絶望的までの亀裂みたいなものは、だからこそ、共感をもって、読まれるんだと思います。

酒井 うん。

高野 有紀子はどうだったかっていうと、「わかっていたわよ」って、なるじゃないですか。始がどんなに義父のお金のことかを、嫌がっていたかっていうところまでは、わかっていなかったとしても、何か、こう、苛立っていたり、不満、不信を抱えているようだ、っていうのは、わかっていた。「でも、それは、私があなたにとって、十分な女じゃなかったからだ」って、有紀子は言うんですね、それを。

酒井 そうだね。

高野 でも、実際に、島本さんが三十五ぐらいになって、奥さんでいたら、始は、全部気持ちを話せていたのかっていったら、そうじゃないでしょ、って思うんですよ。「島本さん、あのね、僕ね、……」って、言えたのかといえば、どうなんでしょう。結局、現実の女は、有紀子的なものになるしかなくて。有紀子には言えない、有紀子はわかってくれないから、島本さんがいればいいのに、って幻想を抱くっていうのは、それは、幼稚で、身勝手だと思います。女性に、求めるものが、生身の女性には不可能なものであって、それが与えられないのが、嫌だって、言っているわけですから。

酒井

春樹は、出会った瞬間の有紀子は、吸引力を感じられる島本さんに通じる女性として描いています。結婚した有紀子はイズミに重なるような女性に後退させています。始には、有紀子は、島本さんが与えてくれたようなものを与

えてくれない、どこか物足りない存在だと感じられている。けれども、人を癒すような感じの、イズミに通じる女性ではある……。そんな有紀子と暮らしているから、満足しきれないっていうようなストーリーに感じますけど。出会った瞬間だけは、島本さんに重なるパーフェクトな女性として有紀子を意識していますが、それが生活を共にする現実の存在になったときに、もう、パーフェクトな存在じゃなくて、パーフェクトなのは、幻想の、滅多に現れない島本さんだと感じている。島本さんに、幻想の理想の女性像をかぶせておいて、で、有紀子は役割存在としてしか感じていなくて、それで無難な生活を送っている。

高野

それで、有紀子は何を考えているのかなんで、どうでもよくなっているっていう感じですよ。

酒井

うん。

高野

有紀子は、たった一人の個としての存在なんですけど、その有紀子が、こういう女性、人間であるかは、有紀子本人には、まったく、与り知らないということに、なってしまうように思えます。島本さんのように、十分な女性である時もあれば、イズミのように、何か物足りなく思える場合もある。それから、将来のこととか生活のこととか、自分を現実の、厭うべき資本主義社会に繋ごうとする、嫌悪すべき存在でもある。それは、有紀子自身が、そういう多面性を、自分で自在に使いわけているわけじゃなくて、男の目が、この場合は始ですけど、その時々、有紀子をかようにでも、変化させているんだと思うんです。

酒井

うん、うん。

高野

だったら、私はどうしたらいいのって、有紀子にしてみたら、言いたいと思うんですけど。見る側にいる、男性ジェンダーの、有紀子にとっては始ですけど、視線が、有紀子を、どんな女にでも変容させるのだとしたら、有紀子は、

……

酒井

ですから、これは、突拍子もない考えなんです。が、主要な女性で島本さんだけが、唯一、「さん」をつけられていて、島本さんと呼ばれ、しかも姓が示されているただ一人の女性ですね。で、有紀子、イズミというのは、「さん」も何もなく、呼び捨てで、名前だけ。そして、イズミの従姉とか、薬局の娘にいたっては、もう、姓も名前も与えられていない。そのように見てきたとき、有紀子という女性は、案外、島本有紀子なんじゃないかと、思っているぐらいでしてね。

高野 はい。

酒井

そう思うのは、有紀子という女性が、ルビンの盃のようなイメージの存在であるからです。有紀子という一人の女を、現実の女として見れば有紀子という名前を持つし、これを幻想の女として見れば、島本さんになるし、ついで。この二人は、実は、一人の女性に過ぎなくて、……、一人の女性の、現実面と幻想面を、始が見ているだけで。島本さんと有紀子が別の女性ではないと考えると、さつきこだわった、この平凡そうな有紀子が、始に吸引力を感じさせる存在であったり、島本さんが与えてくれたのと同じ何かを持っていたりすることの謎が解けるというか。あえて、春樹が、島本さんと有紀子とを重ねるように造形していると思うのです……。始のなかで、一人の女性が、ルビンの盃のように、盃に見えたり、顔に見えたり、というように反転しているのだと思います。さつきちよつと言ったんですけど、お義父さんから、有紀子の自殺未遂の話を聞いて、家に帰ってきてから、有紀子とセックスするのですが、そのとき、始のなかで、島本さんと有紀子との差異が失われています。「でもその日、僕は彼女の中に入りながら、ずっと島本さんのことを考えていた。僕は目を閉じて、今自分は島本さんを抱いているのだと思った。自分は今島本さんの中に入っているのだと想像した。そして僕は激しく射精した。」と言っています。島本さんのイメージを持って、有紀子の中に入っていくわけですね。幻想としての島本さんと、現実の生身の女性としての有紀子、……。

島本さんでもあり、有紀子でもある、一人の女性。

高野 はい。

酒井 だから、最初から、島本有紀子という一人の女性だけしか存在していなかったのではないかと。

高野 そうですね。

酒井 だからね、旅先で会ったというのね、齢が五つ下つていうのは、ちょっと都合が悪いのですが。案外、島本さんと気づかずに、有紀子ですつていうことで、何有紀子か、知らずに結婚しちゃったつていうことは、……。有紀子は始よりも五歳下、島本さんは同級生ですから、同じ齢ですけどね、そこを、まあ、無視すれば、二十何年ぶりに会った島本さん、有紀子の姓を伏せることで、島本有紀子と結婚しちゃった、……（笑）

高野 それは、ちよつと（笑）、……。でも、逆に考えるならば、その、始が、「あ、この女は自分のための女だ」つて、どいう具合で、そう思っちゃうのかは、本人にもわからないと思うんですけど（笑）、とにかく、どいうわけだから、そう思っちゃった瞬間から、有紀子は島本さんに重なつちやうんだと思いますね。吸引力があるつて、なんだか、始は思っちゃったわけじゃないですか。

酒井 はい。

高野 それで、有紀子にとつては迷惑なことに、島本さんの像を、いつも背負っている女になったんだと思います。だから、島本有紀子で、別にかまわないんですけど（笑）。

酒井 うん（笑）。

高野 でも、それは、始の妄想力というか、始からの、勝手な言い分であつて、有紀子にしてみれば、「はあ？ 何、それ……？」つてなるんじゃないでしょうか（笑）。有紀子は、どいう男の、男性ジェンダーの、自分を通して他の女を

見るとか、他の女を求めるつていうのを、ちゃんと、感じ取っていますよね。だから、それは、すごく辛かったつて、言っていますよね。浮気とか、他の女と寝るとか、そういうことじゃなくて、自分のことを見ているようでいて、別の女を見ている、一番近くにいるはずの、夫の目が、自分を素通りして行く、つていうのを、日々感じ続けるというのは、それは、屈辱と、そして孤独の極みだったでしょう。そういう、関係性の断絶ということが、有紀子は、死にたくなるほど、寂しかった、辛かったつて、はつきり、言っています。そして、始は、そういう有紀子の思いに、まったく気がついてもないし、第一、気にしようともしていません。ただ、良い夫、良い父親の役割を果たして、それで妻子を愛し守っていると、思っています。絶望的なまでのギャップですよ。特に、有紀子にとっては。なにしろ、始は、この女は、吸引力を持っている、つて思った瞬間から、じゃあ、君は島本さん二号ね、みたいな感じで、有紀子を扱うわけですから（笑）。私が思う、すれ違いというのは、こういうことなんですけど。

酒井 そうだね（笑）。

高野 現実の、有紀子の思いには、頓着せずに、自分の幻想とか憧憬を、好きなときに取り出してきて、そこに浸るみたいなのは、男性ジェンダーの得意分野（笑）ですよ。しかも、有紀子つていうのが、妙にしっかりしていて、いい奥さんという感じで、……

酒井 今、高野さんが言った、男／女の差異ということ、想起されるのが、江藤淳の『成熟と喪失』です……。『抱擁家族』という、小島信夫の小説の俊介という夫を論じているところなんですけど、……

高野 はい。

酒井 妻を抱いているようでいて、その実、まるで、幼子になって母の胸で、……つていう。

高野 ええ。

酒井

俊介と同様に、始も、五歳年下の有紀子という妻に、むしろ、自分が子どもになって甘えて、守られているんだ、と感じている。有紀子いると幸せになれるんだって、まるで、こう、母に求めるものを有紀子に求めている。有紀子が、それをどう思っていたかというのは、また、別のことでしょ、……

高野

はい。

酒井

その、都合の良い、自分が母に求めるものを、有紀子にかぶせて、自分が子どもになっている。それだけでも、虫がいい、未成熟性を露呈していると思うんですけど。この辺りのことは、始の問題というよりも、村上春樹のジェンダー意識が出ていると言えると思うのですが。有紀子に随分抑圧的な妻役割を担わせていると言えるのは、彼女に次のような言動をさせている所です。「あなたには私の他に好きな女の人がいるんでしょう?」、「ただの遊びじゃなくて」、「ねえ、私だってそんな馬鹿じゃないのよ。私はあなたと一緒に暮らして、あなたと一緒に寝ているのよ。しばらく前からあなたに好きな女の人がいることくらいはわかっていたわ」と、有紀子は言いますね。それでいて、つまり、自分以外に好きな女がいて、その女のことをイメージしながら、自分とセックスしている夫を許容し、しかも、「ねえ、あなたのことが本当に好きよ」と言わざるを得ない有紀子。二度も求めてくる夫に、「ふうん、日記につけておかないか」と、嫌味と甘えを織り交ぜた台詞を投げかけながらも、身体的求めに応じる有紀子。

高野

はい。

酒井

夫が、自分以外の女を、思い浮かべながら、自分の身体を求めてくる、それが夫の性欲が急に強まった原因であることも、有紀子には分かっている。そのような夫の性欲に、彼女は母親のようにやさしく応じている。そのことは、有紀子にとっては、何度も死のうと思うほどの孤独感と寂しさをもたらす状況であった。しかし、彼女は、死を選ばなかった。「でもとにかく私が死ななかったのは、私がとにかくこうして生きていられたのは、あなたがいつかもし私

のところに戻ってきたら、自分がそれを結局は受け入れるだろうと思っていたからなのよ。だから私は死ななかったの。」と、その理由を述べますね。島本さんの形代としての身体を求められても、それが夫の救いになるのであれば応じてあげるし、子どものことも考えられないくらい、孤独で寂しかったのに、夫がいつかもし自分のところに帰ってきたら、受け入れてあげるために、死ななかつたのだと言いますね。

高野 はい。

酒井 作者・春樹が、そういう女性として、有紀子を書いたんだけど。なんで、こんなに従順に尽くすのか、……。こんな女性がいたら、それこそ、男は、やりたい放題で、……

高野 ええ。

酒井 常に、妻が、そうやって、……

高野 守ってくれて。

酒井 守ってくれて、……

高野 はい。待っていてくれて。

酒井 待っていてくれるって、これじゃあ、男は、どこへ行こうが、男は舟で、女は港よって感じになっちゃうから。なんで、春樹は、こんな都合が良い有紀子という妻を作っちゃったんでしょかね。そして一方では、島本さんを、……、どんなにしても、始は、島本さんを理想のパーフェクトの女性として追っかけていきます。パーフェクトな幻想。あんまりじゃないかね、これ（笑）？

高野 でも、まあ、そういう女性像は、繰り返し、文学の中でも描かれてきていますけど、だいたい男は、思いついて旅に出たりとか（笑）、幻想を求めて女のところへ行っちゃったりとかして、でも、なんか、帰ってくるんですよね（笑）。

そうすると、女が待っていて、よくご無事で、お疲れさまでした、みたいな感じで（笑）、よく帰ってきてくれました、って迎え入れるっていうことの、繰り返しで。

酒井 そうなんですよ、『雨月物語』の「浅茅が宿」では、男は、なんで旅に出るんですしたっけ？

高野 たしか、商売だったような。誘われて行くんだったと思いますけど。

酒井 商売？ 女は死んでも待っていて……、帰ってきたら、本当は、妻は死者になっていて、家も無くなっていたんですよね、それでも妻は夫を待っていた。

高野 ええ。もう、男は、出かけている間は、すっかり奥さんのことなんか、忘れているんですけど、なんか、自分が死にそうになったかなんかのとき、急に、思い出すんですよ、置いてきた奥さんのことを、そういえば、……、みたいな感じで。で、帰ってみたら、よく帰ってきてくれました、あなた、って、死者が出迎えるっていう。

酒井 死んでいたんですよ、そのときには。

高野 はい。他にも、漱石なんかもそうだと思うんですけど、女性ジェンダーの役割っていうのは、あの、男が、幻想であれ現実の世界であれ、女のことなんか、突然ぱっと忘れて、自分のことばかり考えて、それは、たとえば将来のこととか、仕事とかでもそうでしょうけど、でも、女のことを思い出すときがあるんですよ。だいたい、失敗したとか、病気とか、心細いときが多いと思うんですけど（笑）。そういえば、女が待っていたんだとか、あの女がいたんだとか、っていつて、帰ってくると、なんだかしらないけど、女の人は、……、「清」ですよ、『坊っちゃん』の「よくお帰になりました。」って言って、「お元気でなにより」みたいな。

酒井 「もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだ」と、主人公が言いますね。

高野 でも、まだどっか行っちゃったりするんですけどね（笑）。

酒井 主人公は清が死ぬまで一緒にいますが、他の多くの作品ではそうでしょうね（笑）。

高野 でも、それでも、帰ってきてくれたって、女が喜ぶんですよ。それが、読んでいて、あの、……

酒井 そういう意味では、男性が書く女性像だから、そうなるわけで、男の願望を全部託しちゃうわけで。

高野 はい。

酒井 だから、男が書いた、……、漱石とか春樹とかが書いた「私」（主人公）っていうのを、男が読むと、作者と夢を共

有できるけど、女の人が読んだら、いったい、どう思っただけを讀んでいるのかな、っていうときに、でも、意外と漱石とか春樹には、女性ファンが多いっていうのがね、僕は、いまひとつわからないんですけど。

高野 はい。

酒井 何言ってるの、っていうふうにはならないの、……

高野 そうは、ならないですね。あの、……、言説というか、習慣というか、女性ジェンダーへの幻想を、当の女性のほうも、共有していますから。

酒井 ああ、内面化……

高野 はい、そうです、内面化ですね。それは、母性幻想であったり、……。あの、ジェンダー差異が、それは、権力構造の中で、下位にいた女性ジェンダーの役割という、もう習慣化している、行動様式であり、認識であるということなんだと思います。

酒井 ちよつと話が逸れるようですが、たとえば、『ノルウェイの森』のハツミさんという女性を、男性読者である僕が読むと、上品でシックな印象を受けます。ハツミさんは、やはり、男性にとつての公約数的な理想像であるわけです。女性が読んでも、それは、やっぱりシックで、……、これはちよつと、お澄ましまして嫌みな女ね、と読まずに、

やはり、女性が読んでも、シックで、素敵な女性として、……

高野 そうなんですよね……。確かに、なんで、ハツミさんは、永沢さんのことが、そんなに好きなんだろう、もっと良い男がいっぱいいるのに、とは思いますね。それで死んじゃうんでは、ハツミさんが、気の毒すぎるって、思うんです。でも、なんか、もう、共感しちゃうんですよね、それでも（笑）。気持ちかわかっちゃうっていうか。

酒井 だから、永沢さんのほうが、俺は結婚しないって言っているんだから、好きな男のほうへ行けばいいんだ、俺は女と好きに遊ぶんだからって、……

高野 俺は頼んだ覚えはない、ぐらいのこと、言いますよね。約束もしていないって。

酒井 うん、約束してないって言ってるね。しかし、ハツミさんは、待つ女で、永沢さんが好きだから、私は待っているって言うって、……

高野 なんで、ハツミさん、そんなこと言っちゃうんだろう、なんで、そうなるのよ、って思いつつ、でも、そういう気持ち持ってわかる、って思ってしまう。そして、そういう自分が、許せない（笑）。そんなんじゃ駄目だって、なんで私は、ハツミさんに共感してるの？　って、自分で奮い立たせない、と、流されちゃうんですよね（笑）。

酒井 ああ（笑）。

高野 有紀子も同じです。私はあなたが帰ってきたら、受け入れてしまうってわかっているのよ、なんていうセリフを読んで、心の広い、いわゆる度量のある女だって、良い女だって、つい思っちゃう。でも、それは、罵だって（笑）、……

酒井 そこを、でも、春樹はもうひとひねりして、そこで、私は死のうとまで思ったんだけど、思い留まったのは、あなたがきつと私のところへ帰ってくるとわかっているから、そのときの為について言ってる。さっきのような男性が描いた

女性像のパターンに、陥っているようにいて、もう一つ、春樹は、結末のところで、作っていると思うんですね。別れたくない、明日からもう一度新しい生活を始めよう、と言う始に対して、「それがいいと思う」って言って。

高野 はい。

酒井 そこで、今まで、男性作家が書き続けてきた、女性のパターンの有紀子で、めでたし、めでたし、と思いきや、……でも、そこで、春樹はもうひとひねりして、……。今言つた、男にとって都合の良い女だけで、終らないかもしれない、最後、……。

高野 ええ。

酒井 有紀子が、鬼になっているのか、般若の面をした怖い存在になっているのか、……。

高野 はい（笑）。

酒井 何になっているのか、骸骨なのかもしれないし。

高野 そうですね。

酒井 わからないっていうところが、……。

高野 ええ、わからないですからね。

酒井 最後が、やつぱり、すごいと思いますね。

高野 すごいですね。そして、なおかつ、始君は、また、いつか、どっか行っちゃうんだろうなことを、思わせるんですね。

酒井 うん（笑）、そうですね。始は、また、きつと悪をなすだろう、周囲の人々を傷つけるだろう、と言っていますよね。

高野

はい。また、悪をなす、「僕」は、つて言つて。「僕」は有紀子をまた傷つけるとかつて、……。その後、始は、有紀子のところへ、また、戻ってきたりするのかな、でも、有紀子は今度はどんな顔で、迎え入れるんだろうか、つて考えさせますよね。有紀子の中には、何か、計画が（笑）、あるんじゃないだろうか、つて思っちゃったりするんですけど。だけど、やっぱり、さっき言つたみたいに、言説としての、母性とか包容力とか、そういう女性観を、有紀子は、きちんと踏襲していると、私は思いますし。

酒井

うん、……

高野

私は、春樹が、始に対して、あまり可愛そうなこと、残酷なことは、できなかったんだなって、思うんですね。有紀子に、あなたの手を離さない、つて言わせる、つていうことで、始を、宙ぶらりんの独りぼっちにはさせなかった。そういう、終り方を、……。もちろん、その後が、何かあるよ、つていうことは、春樹らしく、匂わせてはいますけれども、春樹が、選んだ物語の終り方は、始にとつて、救いを用意したつていうことが、なんか、考えさせられます。始への、作者の親和性つていうのか、愛着みたいなものでしょうか、……。なんだか、そんなものすら、感じてしまうんです。

酒井

第一章のところでも、話したんだけど、有紀子は、あなたは、まだ何も尋ねない、つていうことを、二度も言うわけだし、「あなたは何もわかっていない」つていうことも言つていて。始が、どこへ行こうが、どこのどんな幻想を追っかけていようが、とにかく、自分のもとに帰ってきたら、しつかり、受け止めてくれる女性のようであつて、でも、もう、これは、「あなたには何もきつとわかってないのよ」と言う様に、もう、この溝というのは、埋まらないだろうし、最後の結末の有紀子がどんな顔を、翌朝、しちゃうのかつていうのも、わからないし。

高野

はい。

酒井

「あなたには何もきつとわかってないのよ」と、突き放している面もありつつ、でも、帰ってくれば、受け入れるという、両面作戦と、私は見たわけですけども（笑）。少なくとも、ここで、「あなたは何もわからない」っていうのは、始の内面を、見抜いているというか、見透かしているわけで。ある意味、ここで、有紀子が、春樹の作品によく出てくるような、超越者のような女性に、最後、なっていることも確かなので。この、「あなたは何も尋ねない、尋ねよう」としない」っていうのは、笑って聞いて欲しいんですけど（笑）。「君は、本当は、島本さんだね？」、って聞かない、「君は、本当は、島本さんだろう？」、って、尋ねないって、言っていると、私は思うんですけど。

高野

えー（笑）？

酒井

だって、別れたくないっていうことは、何度も、……。『あなたは私と別れたい？』と聞かれた始が、「僕は君のことを愛しているよ」って答えています。しかし、有紀子は、愛しているかどうかなんていうことは、今、聞いているんじゃないくて、答えは、イエスカノオかの、どちらかしかないの、と詰め寄りますね。始は仕方なく、「別れたくない」って言います。この辺り、有紀子の方が尋問者になっているのですから、始が何を尋ねない、って言っているのか、どうしてもわからない。作品の中からでは、私は、……、わかるんでしょうか、きちんと読めば。何を尋ねないのか、その、Xが、作品で、わかるように書いてあるのか。始が、有紀子を愛している、有紀子と別れたくない、と言った後でも、彼女は、あなたは何も尋ねない、と繰り返しているのですから、無論、始の側の気持ちについて言っているのではないのでしょうか。有紀子の問いに答えていないわけではないのですよね。

高野

でも、始は、有紀子に対して、「君は、僕と別れたいの」って、聞かないじゃないですか。

酒井

え？

高野

有紀子に対して、「君は、僕を許してくれるのかい？」とか、「君は、これからも僕と一緒に暮らせるのか？」とか。

有紀子に気持ちを、聞かないですよ。

酒井 それは、有紀子が、勝手に、先に、言っちゃうでしょ。私はあなたが好きだ、とか、あなたを受け入れるでしょう、とか。

高野 それは、「あなたは何も尋ねない」って、言ってから、……。有紀子は「私と別れたい？」っていうふうに、聞くけど、始は、「君はどうなの？」とも「もう、僕に愛想を尽かしたんじゃないの？」とも、有紀子の気持ちや、言葉を聞こうとは、していないんですよ。自分は、「ねえ、有紀子、僕は君が好きだけど、僕はろくでもない人間なんだよ。」なんて言うだけで、得意の、自分語りを始めてしまつて。僕には資格がない、とかは言つても、有紀子の思いを、それこそ尋ねようとはしないで、決して。こと、ここに至つても。

酒井 それは、でも、まあ、作者にはわかつていて、作中人物にはわからないことなのかもしれないけど。有紀子が、後に言語化するような、私は、あなたが帰ってきたとき、いてあげたいから、私は死なないんだ、とかつて言つて、許すも許さないもなく、いつでも受け入れOKよ、つていうのは、もう、それは、尋ねなくても、わかつていることとして、春樹は、書いているから、私は、そのことは、……。少なくとも、作者は、始が尋ねないことの内容として予想していいと思うんですけど。それは、もう、自明のこと。

高野 でも、最後に、有紀子が、「あなたは私に向つてまだ何も尋ねていない。」つて言つて、はじめて、主人公は、「明日からもう一度新しい生活を始めたいと僕は思うんだけど、君はそれについてどう思う？」つて、尋ねたつて。

酒井 そこで、尋ねたの？

高野 はい。「僕は尋ねた。」つて、書いてあつて、それに対して、『それがいいと思う』と有紀子はそつと微笑んで言った。」つて。この場面に繋がっていると、私は思います。やっぱり、自分のことばかり考えて、有紀子を前にして

も、自分のことばかりしゃべっている始に向かつて、私の気持ちを聞きなさいよ、聞くべきでしょ、あなたは、つて、有紀子は思っているんじゃないでしょうか。

酒井 「明日からもう一度新しい生活を始めたいと僕は思うんだけど、君はそれについてどう思う？」 っていうのは、でも、これは、「別れたくない」の、バリエーションに過ぎないんじゃないの。別れなければ、そうなるわけだから、「あなたは私と別れたいの？」 っていう問いに対して、「別れたくない」 っていうた、その変形として……、

高野 でも、君はそれについてどう思う？ 　つて。これも、また、まどろっこしい言い方ですけど、君はどうなの？ 　つて、「一応有紀子に聞き返しているじゃないですか？ 　で、「それがいいと思う」 　つて、有紀子は言うので、……

酒井 ここで、一応、尋ねて、答えが返ってきて、終りと思いきや、でも、最後に、……

高野 はい。

酒井 誰かわからない人がいて、……

高野 背中にそつと手を置くんですよ。

酒井 背中にそつと手を置くんですよ、まあ、わからないままでね、……

高野 有紀子が、何度も「あなたは何も尋ねない」とか、「何もわかっていない」とか言うのは、あの、有紀子も、きつと、もつと前に、島本さんが登場する前に、こういうふうな、始に聞けばよかったつて、思っているからなのではないでしょうかね。自分も、一応、表面上、幸せな暮らしを壊さない様に、目をそらして来たつていう、そういう、やつぱり後悔みたいな思いがあつて、だから、自分も正面から尋ねるし、あなたは何も私に聞くことはないの？ 　つて、こつう、迫つて。始が、理屈をこねて（笑）、逃げるのを、今回は逃がさないつていうような、覚悟があるんだろうと思つます。私は、先生がおつしやつた、「君は、島本さんだろう？」 　つていうのは、……

酒井 うん（笑）。

高野 そう聞かれても、有紀子は、「違いますけど」って（笑）、答えると思うんですけど（笑）。「冗談じゃないわよ」って。そんな感じになるんじゃないかと（笑）。

酒井 「それは、あなたがそう思っているだけでしょ」って（笑）？

高野 ええ（笑）。

酒井 ところで、これも、本質論に帰ってみれば、現実での男／女の関係の不可能性っていうところで、この『国境の南、太陽の西』っていう作品は、始が島本さんという幻想の女性を追いかけることによって、生身の現実の女性である有紀子と関係が成立しない、っていうふうな作品なんでしょうけども。そこを、もうちょっと広げれば、この作品は、結局島本さんが出てくると、通俗小説のような面が出てきて。妻がいるのに、他の女性を愛して、たとえば、石川県に行くっていうときは、嘘をつかないといけないとか、……

高野 はい。

酒井 まあ、不倫小説のような要素が出てきちゃって。そのことで、男／女の関係の不可能性、ということが生じているわけで、根本的に考えると、男女っていうのは、結婚しようが、恋人関係であろうが、一对一の関係に対幻想を持つて、互いが互いの異性愛関係を排除しなければいけない、っていう、恋愛幻想っていうのか、……。それが、結局、男女の関係の溝を作り、ここで言えば、始と有紀子との関係の不可能性というのが、私は、あると思つて。なぜ、人間は、一对一の関係を志向して、互いの異性愛関係を排除するのか。そこに、私は、現実での、男女の関係の不可能性というのが、あると思うので、それは、根本的に、もう、どうにもならないことなのか、という疑問があるんですけども。

高野 一対一の関係のみが、正常で、正当であつて、許されるということが、前提になっていますからね。

酒井 たとえば、キリスト教で、神の前で結婚式をするとき、この男／女を永遠に愛することを誓いますかつて言われて、はいつて、誓つて、結婚が成立する。まあ、神に誓わなくても、民法は、婚外の異性愛関係を認めていないですよ。

高野 ええ。

酒井 それは、裏をかえせば、そんなつちやうからで……。

高野 はい。放つておくと、そんなつちやうから。

酒井 だから、神とか法律で規定しているわけですね、それはいけませんよつて、お互いに。高校生のとき、始とイズミとは一対一の性愛関係になつていて、その関係のなかで、始がイズミの従姉とセックスしたら、なぜ、イズミが傷つくか。始の行為が、イズミの恋愛幻想から逸脱しているから、イズミはそれを許せないのですね。始は、イズミの従姉との性愛行動を、決して本質的なことではないし、何でも無いことなんだ、僕と君との関係にとつて何の影響力も持たないことだ、つて言いますよね。君を裏切つたというやましさをほとんどない、とも。でも、イズミは、そんな言い分には、とても納得できないからこそ、そのことで、ひどく傷つき、損なわれてしまつたわけですね。そして、始と有紀子の夫婦関係においても、有紀子が妊娠しているとき、始は、何回か、他の女と寝たけど、それは、浮気のうちにもはいらないつて。

高野 はい。そうですね。

酒井 イズミにはれたようには、有紀子にその性愛関係がばれなかつたのは、適当に嘘をついてごまかしていたからでしょうね。妊娠している有紀子に、始の婚外性交渉をいちいち報告して、なおかつ、夫婦関係が保たれていたとは思われないですね。ですから、結婚していろいろが、恋人関係であろうが、その一対一の関係以外の男／女関係を排除し

なければ、成り立たないというところは、この『国境の南、太陽の西』でも、……。島本さんがやって来て、始が惹かれたら、有紀子に嘘をついたりしないで、「君を好きなことは変らないけど、島本さんという、好きな女が現れたんだよ」と告白し、「あ、そう。三人で仲良くやりましようね」と有紀子が言えれば、何も問題はないわけですが……。だけど、そうはいかない、なぜ、そういえないかという原因を考えると、僕らが、一対一の性愛関係に入り込むうとする男／女を排除しなければ、……

高野

一番先に言ったことですけど、出逢ったころの始と島本さんとの間には、いわゆる性愛というものが排除されていて、そこから、この物語が始まっていて、それが、特権化されています。それと、この小説を通じて、セックスとか快楽というものが、どうでもいいものというか、……。あの、その場限りのこととか、本質的なことではない、というように、語られています。どうして、春樹は、そのような描き方をするのか、って考えてみると、それは、あの、男／女、ヘテロの場合、どうしても、性愛関係が、身体とか快楽とか、としてですけど、介在してしまうということなんじゃないでしょうか。そこから逃れられない男／女っていうものの、その不可能性、絶望感、のようなものを読み取ってしまうんです。性愛というものが、介在すると、男／女の関係性っていうものが、その場、その時、によって、ぐるぐると、変わってしまうんだと思うんです。相手と親密になりたいとか、もつとよく理解したいとか、って思つて、近づいていったとしても、そこには、身体の欲望、快楽への希求が、どうしても、混じつてきてしまつて。じゃあ、愛情を求めるのと、肉欲と、どこが違うのかっていうと、その境目は、わからなくなつてしまう。自分も、相手も。まして、性愛関係を持った後では、その、男／女を、セクシュアルな視点を排除して、考える、語ることが不可能になると思うんです。欲望、快楽は、自分の中から生じているはずなのに、相手が、その異性が、その欲望を掻き立てている、とも言えるわけです。両者が、加害者であり、被害者であるような、関係性にはまっていってしま

う。それは、もう、私たちが身体を持つて生きていくしかない以上、仕方が無いことなんですけど。触られれば気持ちよくなるし、目とか耳とか、感覚機能がいくらでも刺激を受け取って、あつという間に、人間の身体が欲望する。それは、好きとか、嫌いとか、愛とか、そういうものと関係ない、なぜだか、そういう風に、私たちの身体はできているわけです。そういう身体をもつて、同じく身体をもった異性と向い会わなければならないので、……、煉獄とでもいいましようか、なんといいましようか、……

酒井 そう。そういう、人間のありかたが、根底にあるから、この作品の中の始と有紀子の男／女関係にも限界があるのだと思います。そういう男／女関係の不可能性は、この作品に限らないですけど。

高野 はい。あの、聖書の中では、結婚というのは、一人の人を永遠に愛し続けることを、求めているんですよ、愛する、じゃなくて。愛し続けることを誓うっていうことなんですよ。

酒井 ああ。

高野 だから、とっても能動的な、意思に基づく行動を、求められているのだと、私は、思っています。愛し続けるという意志を、常に持ち続け、努力し続ける。世や他者からの、刺激や誘惑に耐えて、夫婦としての生活を守る、ということ誓うわけです。それをしなければ、愛は無くなる、結婚は破綻する、っていうことを、前提にしているのだと、私は、聖書から、読みとっています。

酒井 はい、はい。

高野 なので、結婚に関しては、冷静に、理知的に決定しなければならない、という教えなんですよね。愛し続けることができるのか、暮らしを共にして、精神的にも肉体的にも、そして、社会的にも、安定して、それを続けることができるのか、理性的な判断が求められるのが、結婚なんです。動物的に、本能的に、この人が好きだとか、一緒にい

ると楽しいとか、そういうものとは、結婚というのは、まったく違うという教えなわけです。だから、この人を、ずっと、愛し続けるという努力が、一生懸命できるか、やり続けられるか、ということ、まず考えて、相手を選びなさい、ということなんだと思います。

酒井 それから考えると、始が有紀子を選ぶときなんて、そんなもんじゃなくて、……。

高野 勝手に、吸引力を感じちゃって（笑）。

酒井 ただ、好きなんだからってという感じでね。

高野 途中で、あれ、なんか違う、なんて思っ、……

酒井 だから、さつき、高野さんが読んだところで、有紀子の何かが好きだって、……

高野 顔が好きだって。相変わらず美しいとかって。

酒井 そこで言っているのは、愛するっていう行為とは違って、たとえば、林檎が好きだ、大福餅が好きだ、っていうのと変わらないですね。

高野 そうですね（笑）。

酒井 努力して好きになるわけじゃないですものね、大福餅を（笑）。

高野 ほんとに。それは、まあ、趣味嗜好っていうやつなので（笑）。

酒井 趣味嗜好でしょ、その、始がいう、有紀子の顔が好きだ、とかっていうのは。

高野 あんまり美人じゃないけど、有紀子が好きなんだよね、「僕」は、っていう、軽い感じですね。だから、ヘテロにおいて、あの、すごく本能的なもの、……、パッションとか、情熱とか、そういうものではなくて、関係性を築きあげていくという、長い年月を、頑張って、その関係を培っていくんだ、守っていくんだっていう、意志と努力が無い

と、あつという間に、壊れてしまうものなんだと思います。出逢ったときの、吸引力だけが、二人を繋ぐとしたら、それは脆いものですよね。だって、人は歳をとるし、変わっていくものだから。刹那刹那、変化するし、年月が経て、さらに変わっていきます。だからこそ、聖書は、神の前で誓う様に、求めているんだと思います。なので、不可能性っていうのは、ちょっと、違うかもしれませんが、ただ、吸引力だとか、火がついたとか、そういう言葉で言われて、うまくいくほど、ヘテロの、男／女の関係は、簡単なものではないって、思っているんです。そして、有紀子は、それを、わかっている、とも思います。

酒井 ああ。

高野 それから、私が思う、男／女の不可能性っていうのは、最初に先生が、おっしゃったことに戻るようなんですが、本当に島本さんはいたんだろうか、っていうことなんですよね。自分自身を、好ましいと感じた、身近な異性に投影して、自分の理想とする異性としていただけで、それは、自己愛でしかないんじゃないのかって思うんです。たまたま選んだ異性に、自分の幻影を見て、その子のことが、自分は好きなんだって、思う。それは、本当に好きなんですよ。好きだつていう思いは、幻想ではない。では、そうなったときに、目の前にいる、現実の女の子は、いったい何なんだろう、どうなっちゃうんだろう、つて思うわけです。この男／女は、出逢ったと言えるのかなって。そういう、繰り返し、この小説の中には書かれていて、島本さんもそうだし、イズミもそうだし、有紀子もそうだし。始君は、この女たちに、本当には出逢えていないって感じるんです。

酒井 それは、だから、今の話を聞くと、春樹はやっぱすごいのかなって、思っちゃうのは、男性が女性を愛するとき、まさにそうだっていうのは、アニメっていう言葉を、ユングが使っていて。男はアニメに衝き動かされている。

高野 はい。

酒井

心の中に、運命の女、永遠の女がいて。どんなに女性遍歴を重ねていこうが、男はその運命の女を結局求め続けているだけで。男は決してありのままの現実の女を見ていなくて、自分のなかに形成されている運命の女を追っかけているだけであつて。現実の女っていうのは、心の中の運命の女をかぶせるための形代っていうか、道具であるわけですね。そう考えると、島本さんに、運命の女っていう言葉は使っていないけど、始の運命の女と考えれば、常に島本さんの面影を追っかけていく理由がよくわかるわけで、春樹は、男性が女性を求める形っていうのを、すごくうまく書いているなつて思いますね。

高野

はい。で、しかも、その幻影っていうのも、本当の自分とは、言えないわけじゃないですか。本当の自分のことを、理解した者も認識出来た者も、いまだかつていませんよね、人間には。ましてや、十一歳の少年が考える、本当の自分、自己像なんて、自分が今いる社会、大人たち、他者からの視線や言説を、寄り合わせて、見比べて、引っ張り出して来た、自分でしかないだろうし。自分は、きつとこうなんだ、こういう人間なんだつて、思っているだけでしょう。他所から借りてきた幻影だったり、他者からの誘導だったり。ですから、投影しているはずの自己像が、本当の自分とは、かけ離れているわけですね。それは、女性ジェンダーに、二重に違うものを、かぶせていることになりました。なので、彼が見ている、目の前の異性は、まったく、現実の、生身の女性とは、異なっているということです。男が女を愛する、求めるつていうことは、私は、こういう意味で、不可能ではないのか、と考えるんです。

酒井

そのことを有紀子はわかつているから、「私のこと、本当に好き」とか、聞くわけですね。この人が、追っかけているのは、幻想か何かで、本当の私じゃないつて、有紀子はわかつている、つて書いていますね。

高野

だけど、私はあなたのことが好きだから、とりあえず手は離さないわよ、つていう感じで、そういう有紀子の太っ腹なところが、やっぱり有紀子つて女だなつて、思っちゃう。で、え、それでいいのか、そんなの許しちゃつて、い

いのかしら、って、後から、私はいつも思っちゃうんですね。その繰り返しです（笑）。